

「ラテルネ」から桂離宮―月の東西比較

白百合学園高等学校 一年 関口 佳音

月といえば、私はドイツ語の「ラテルネ」という歌が自ずと口から出てくる。ドイツ語圏の国々では十一月十一日の聖マルティン祭の夜、子供たちは紙提灯を持って、「ラテルネ、ラテルネ／太陽よ、月よ、お星さまよ／私の灯を消さないで」と歌いながら、そぞろ歩く。これは次のような伝承に基づく。冬の夜、凍えそうになっている人に自分のマントを切り与えたマルティンという人がいた。人々は彼の服を見て笑つたが、その夜、マントの切れ端を着たキリストが夢に現れたという。

私は五歳から七歳の二年間、ウイーンで過ごした。一年目は現地の幼稚園、二年目は日本人学校に通った。幼稚園では初めドイツ語はさっぱりわからなかつたが、歌だけは意味は分からずとも自然と口ずさめるようになつた。そして、あの澄み切つた月の夜、紙提灯を持ちながら大声で歌つたことが忘れられない。私は幼稚園ではほかの子供とほとんど話さず、ほぼ一年沈黙を貫いた。この歌は、言葉が通じずに悩んでいた頃の私の心の支えになつた。

二年目の春、期待に胸を膨らませて日本人学校の門をくぐつた。もう言葉で心配する必要はないのだ。そこで素晴らしい日本人の音楽の先生に出会い、たくさんの名曲を教わつた。最初に歌つたのが「おぼろ月夜」だつた。「おぼろ」という言葉を知らなかつたので、「そぼろみみたいで、おいしそう」と思つたが、教科書には一面の菜の花とかすんだ月の写真が載つていた。歌詞には「月」という言葉がたつたの二回出てくるだけで、「見渡す山の端 霞深し」というように、月の周辺の美しい風景が細かに描写されている。日本の美意識は、中心にあるものだけではなく、周辺にあるささやかな存在にも目を向けているのだ。私はこの歌を知つてから、月だけでなく周りの空間に気をつけるようになった。そのせいか今でもお月見のときには、月よりも団子に关心を持つようになつてしまつた。

その頃、国語の授業で、月の模様は国によつて見方が異なることも学んだ。日本では、月の中に餅をついているうさぎを見る。これは、腹をすかせた旅のために自ら身を火に投じたうさぎに神さまが感心し、その姿を月に投影したと言われる。他者への思いやり、自己犠牲という日本人の美德とこれは重なる。

一方、ドイツ語圏では、月の中に「月男」を見る。規範を破った男が罰として月に送られた説もある。月に人間の顔や姿を見ているのだ。「聖マルテン祭」のイメージも、何らかのつながりがあるのかもしれない。

帰国して、小学六年生の頃、イスの作家ヨハンナ・シュピリの小説『ハイジ』を読んだ。ハイジはアルプス山奥のアルムじいさんと幸せな日々を送るが、突然、フランクフルトという都会での生活を強いられる。ハイジはホームシックのあまり夢遊病にかかる、夜になると、家じゅうを歩き回るようになる。この「不眠時夜行症」をドイツ語では「Mondsucht（月への渴望）」だと知ったときは驚いた。ドイツ語圏では、月の怪しい光は人間の内面にも影響を及ぼすと考えられ、夢遊病者を「月に憑かれた人」ととらえるらしい。

日本では月の肯定的イメージが建築にも大きな影響を与えていることを、最近読んだ桂離宮に関する本を通して知った。桂離宮は、十七世紀に八条宮智仁親王が月見を意識して造営した。彼は武士中心の世の中にあっても、雅や風流を貴ぶ朝廷文化を復活させようとした。その中核をなすのが「月見台」である。月見台は、池の水面に映る月を鑑賞する、月を迎える装置といえる。池にせり出しているが、手すりはない。屋内と自然がここで何の分け隔てもなく出会うためである。実は私が読んだのは『日本美の再発見』という、ドイツ人の建築家ブルーノ・タウトが書いた本（篠田英雄訳）である。彼が桂離宮に関心を寄せたのも、もしかすると月に対する関心のせいかもしれない。

月の満ち欠けは日本人の心の奥にある「無常観」にも通じる。私たち日本人が月を見て心が安らぐのも、月がもたらす静けさにゆえんするのだろう。沈黙は金、とは特に日本で通じる美学である。しかし西洋ではなんでもはつきり言わないと、何も考えてないとされ、沈黙や空白は評価されない。それは月に対しても、計り知れない恐ろしいイメージとなつて現れているのだろう。

私は学校からの帰り道、自宅へ向かう坂の上に輝く月を見上げ、言い知れぬ安らぎに満たされる。家族とは深い絆で結びついているが、それを口に出したことはない。満月が黙つたまま、私に何かを語りかけている気がした。